

報告・資料

高杉一郎とエスペラント

太田 哲男

桜美林大学名誉教授

TAKASUGI Ichiro and Esperanto

OTA Tetsuo

Professor Emeritus, J. F. Oberlin University

キーワード：高杉一郎、エスペラント、エロシェンコ、魯迅、
スターリン主義、秋田雨雀

はじめに

本日は、このエスペラント大会にお招きいただき、ありがとうございます。

私は「高杉一郎とエスペラント」という演題でお話しさせていただきますが、最初に高杉先生と私の関わりを少しお話しておきます。

もう22年も前のことですが、ちょうど2000年に、私は石原吉郎についての本⁽¹⁾を編集して出版しました。高杉先生も石原吉郎もシベリアに抑留された人です。この本を、お名前だけ知っていた高杉先生に献本しました。お返事をいただいたので、先生のお宅にうかがってもよいですか、と厚かましくも申し上げました。お許しをいただき、東京の原宿にありました先生のお宅にお邪魔しました。これが高杉先生との初対面です。高杉先生は、2008年1月に99歳で亡くなりましたが、その直前まで、7年ほどの間、ほぼ月に1度くらいの割合でお宅を訪問し、いろいろお話をうかがっていたのです。

私は今、高杉先生にお宅にうかがってもよいですかと申し上げたと言いましたが、なぜそんな不躰なことをしたかと言いますと、高杉先生の書かれた著作をあれこれ読むうちに、この人は社交的で、話好きの人に違いないし、自宅に客が来ることに抵抗感がない人だと感じていたからです。実際、そういうかたでした。

しかし、今になって考えますと、お宅によく通った割には、エスペラントのことについては、さほどうかがった記憶は残っていません。じつに残念なことですが、今となっては致し方ありません⁽²⁾。

しかし、エスペラントを念頭に置いて高杉先生のお仕事を顧みますと、エスペラント

に直接には関わりのないことのようにみえても、エスペラントと関連していると感じるところがありますので、本日はそのようなことにふれながら、お話しさせていただきます。

最初にお断りしておいた方がいいのは、高杉一郎という名前は、戦後に使われたペンネームで、戦前にはこのペンネームは使用していないということです。しかし、本日は、便宜的に高杉一郎としてお話しさせていただきます。また、高杉先生の呼び方についても、ここでは、高杉さんと言ったり、敬称抜きに高杉と言ったりするかと思います。が、ご了解ください。

高杉の仕事

高杉一郎という人物とエスペラントとの関係といえば、すぐに連想されるのはエロシエンコです。しかし、年配のかたはともかくとしまして、若いかたがたは、高杉一郎という名前、エロシエンコという名前になじみが薄いかもしれません。

そこで、高杉一郎について最初に概略的なことを申し上げます。有名な著作は『極光のかげに』というシベリア俘虜記で、4年近いシベリア抑留経験を描いた作品です。今から30年ほど前の1991年に岩波文庫に入りました。この『極光のかげに』は、芥川賞候補作になりました⁽³⁾。

それから、フィリパ・ピアスの『トムは真夜中の庭で』という作品の翻訳があります。これは児童文学の分野ですが、ロングセラーになっていて、今でもよく売れています。

大江健三郎さんは、高杉の文章を非常に高く評価しています。この『トムは真夜中の庭で』に対しては、「実に優れた訳です」と言っていますし、『極光のかげに』などに対しては、「戦後文学の最高位にある」とまで言っていて、最大級の賛辞を与えています。

高杉はかなりの数の作品を翻訳していますが、エスペラント作品の翻訳では、長谷川テルの『嵐の中のささやき』の翻訳があります。そして何よりも『エロシエンコ全集』です。これは、1959年に出版され、その後、1974年に『エロシエンコ作品集』2冊がみすず書房から刊行されました。この『作品集』も、今から50年近く前の出版で、当初はそれなりに売れたと思いますが、今は新刊本で入手可能なエロシエンコの日本語訳作品はほぼなくなっていると思います。

高杉先生は私に、「太田君、翻訳はいいよ。ずっと印税が入るからね」とおっしゃいました。確かに、『トムは真夜中の庭で』の収入は相当なものだと思いますけれども、エロシエンコ作品翻訳の印税は、もはや出なくなっていると想像します。

エロシェンコ

印税のことはともかくとしまして、エロシェンコについての話に行きます。エロシェンコは1890年にロシアで生まれた詩人です。4歳のときに視力を失いました。9歳から17歳まで、モスクワ第一盲学校で学びます。あるとき、アンナ・シャラーポヴァという女性から、「あなたには音楽の才能があるようだから、もっとちゃんとした音楽教育を受けるといい」「それには、イギリスに行くといい」と勧められます。「外国語ができない自分がイギリスまで旅行できるわけがない」と答えると、アンナは、エスペラントを学ぶとよい、と説明してくれたそうです。そこで、エスペラントを学び、1ヶ月後には会話ができるようになった。そして、イギリスに行くこととなります。

ロンドンで、エロシェンコは、亡命していたクロボトキンの住まいを訪問しています。なぜここでクロボトキンのことを申し上げるかと言いますと、高杉がクロボトキンの自伝『ある革命家の手記』を訳しているからです。

高杉は、エロシェンコの作品を翻訳・編集しただけでなく、エロシェンコの伝記を書きました。伝記を書くためには、エロシェンコについて詳しく知らなければならず、そのためにはクロボトキンについても知らなければならないという関係がありました。

また、クロボトキンの自伝は、既に大杉栄が翻訳していました⁽⁴⁾。大杉はエスペランティストでしたし、日本におけるエスペラントの歴史を考える上では、見逃せない人物のひとりです。それに、大杉はエロシェンコに会っています⁽⁵⁾。高杉は、大杉が翻訳したクロボトキンの自伝を新訳しています。そういうつながりがありました。

大杉栄の手紙⁽⁶⁾をみますと、日露戦争のすぐあと、1906年に、大杉は牢獄の中でエスペラントを学んでいたことがわかります。そして、出獄後、大杉は東京の本郷あたりにエスペラントの教室を開いたといえます。日本エスペラント協会ができた年です。この教室で学んだのは日本人ばかりではなく、中国人留学生もいたのだそうで、これが中国でエスペラント運動が盛んになる一つのきっかけになりました。

エロシェンコはロンドンで、「日本では、盲人が仕事をして生計を立てている」と聞かされます。いわゆる按摩です。それを聞いたエロシェンコは、日本語を勉強して、シベリア鉄道を通して日本にやってきます。ちょうど第一次世界大戦が始まる少し前のことでした。日本人エスペランティストの世話で、エロシェンコは、東京の雑司ヶ谷にある盲学校の特別研究生となることができた。

翌年1915年の春、エロシェンコは、盲学校の近くの森を散歩しているとき、ある人から話しかけられた。それが秋田雨雀(1883-1963)だった。これ以後、エロシェンコと秋田雨雀は非常に親密な関係になります。秋田雨雀の自伝(『雨雀自伝』)によれば、雨雀はエロシェンコが盲人でありながら世界のエスペラント運動のために熱心に働いていることを知り、エスペラントを勉強しようと思ひ立ちます。また、『秋田雨雀日記』1915年2月22日条に「エスペラントを始めた」と書かれています。その10日ほど後の3月3

日の記事に、「エスペラントと平和運動。平和運動をすすめろ！」と書かれています。雨雀にとっては、エスペラントと平和運動は、不可分のものだと思われていたのでしょう。そこで、雨雀はエスペラント運動にも加わります。

この両者の交流によって、盲学校へ通うことを中心とするエロシェンコの生活が、日本の文学者や社会主義者と交流したり、演劇を見たり、映画に接したりするようになる、ということで、世界が広がりました。

エロシェンコの創作活動

エロシェンコはその後、日本からタイ、ビルマ、そしてインドへと出かけていきます。盲学校を作ろうという思いがあったようです。けれど、インドに行ったのが、偶然ですがちょうど1917年11月で、ロシア革命直後です。当時インドを支配していたイギリス官憲は、エロシェンコがロシア人だということで、要注意人物とみなし、やがてインドから追放してしまいます。そこでエロシェンコは日本に戻ってきますが、当時は日英同盟がありますから、要注意人物だというレッテルを貼られて日本に戻ってくるわけです。

インドを追放されたエロシェンコが日本に戻った1919年7月の少し前には、朝鮮の三一独立運動があり、中国での五・四運動がありました。そういう時期に、東京在住の社会主義者と朝鮮・中国の民族主義者との親睦団体であるコスモ倶楽部という団体が組織されました⁽⁷⁾。コスモというのは、コスモポリタンの略称です。その主唱者の一人が堺利彦ですが、堺があまり表面に出るのはよろしくないということで、吉野作造がこの倶楽部の世話人のようなことをしていました。そういうコスモ倶楽部に、エロシェンコも加わったのです。

コスモ倶楽部とは別に、社会主義者の集まりとして、日本社会主義同盟が1920年12月に結成されます。これは、マルクス主義者やアナーキスト、文化人、ジャーナリストの集まりでしたが、エロシェンコもこの集まりに参加し、それがきっかけとなって、内務大臣の指示によって日本から追放される羽目になりました⁽⁸⁾。

当時、エロシェンコは、新宿・中村屋の相馬黒光の世話を受けていて、その家に暮らしていました。鶴田吾郎や中村彝がエロシェンコの肖像画を描いたのは、この中村屋の縁です。しかし、エロシェンコは、中村屋の住まいから当局に連行されていきます。

最初に日本に来たときの滞在期間が2年余り、それからインド追放となって日本に戻ってから1921年5月に日本を追放されるまで2年弱。合わせて4年ほどの日本滞在でした。

日本に滞在している間に、エロシェンコは、童話などを書くようになり、創作集である『夜明け前の歌』と『最後の溜息』が、ともに秋田雨雀編として、1921年に刊行されました⁽⁹⁾。しかし、刊行されたのは、エロシェンコが日本を追放されたあとのことでした。

このとき高杉一郎は13歳になろうという頃です。高杉は伊豆修善寺近くに住んでいましたから、同時代的な出来事としては、エロシェンコのことは何も知らなかったと思います。

日本を追放されたエロシェンコはソ連に帰国しようとしたのですが、当時はロシア革命直後の混乱もあり（詳しく言えば、政治的事情がありますが、ここではふれません）帰国できません。そこで、エスペランティストのネットワークを頼って上海に行き、中国のエスペランティストの援助⁽¹⁰⁾を受け、1922年に北京にたどり着きます。

魯迅

エロシェンコが日本を追放されたというニュースに、北京で注目した人がいました。魯迅です。魯迅は、こう書いています。「一九二一年五月二十八日、日本が一人のロシア人盲者^{もうしや}を追放して以来、現地の新聞には多くの論評が現れ、私もそれではじめてこの漂泊する失明の詩人ワシリイ・エロシェンコに注意を向けるようになった。」というのです。

魯迅はエロシェンコ⁽¹¹⁾の作品について、こう言っています。

これらの作品は、エロシェンコが異郷に身を寄せている間に、「日本人に読んでもらおうとして書いた童話風の作品である。全体を通観するに、彼は政治、経済には関心を持たず、危険思想などといった感じもない。彼は一つの、幼いが美しく純粋な心を持っているにすぎない。」というのです。

魯迅はエロシェンコの「沼のほとり」という作品を日本語から翻訳していますが、魯迅の「訳者附記」では、この作品が「目に止まり、そこで、彼の心を中国人に見せるべく紹介せずにはおられなくなった」と書いていて、魯迅がエロシェンコ作品を評価していた、同時代的なものを見ていたということがわかります。

魯迅はまた、ノーベル文学賞をもらったインドのタゴールの作品よりもロシアの盲人エロシェンコを自分は愛するとまで書いています。

まもなくエロシェンコは上海から北京にやってきます。そして、魯迅と周作人兄弟の住む家に一緒に住むようになります。魯迅はエスペラント支持者、周作人はエスペランティストです。ちょうどこの時期、北京大学では、学長の蔡元培のリーダーシップのもと、エスペラントを必修科目にするという方針が出されていました。そういう状況があり、エロシェンコは北京大学でエスペラントを教えるようになりました。また、魯迅は、エロシェンコの作品をいくつか翻訳し、その童話集に序文を書いたりしています⁽¹²⁾。

しかし、エロシェンコは、1923年4月には北京を離れ、モスクワに向かいます。なぜ北京大学を辞めたのかは、エスペラントとは直接関係ないことであろうから、ここでは説明を省きますが、いずれにせよ再び中国に戻ることはありませんでした。エロシェンコ

と魯迅の交わりは、短いものでしたが、じつに濃密なものでした。

秋田雨雀

先ほど、エロシェンコを日本の文化人や社会主義者との交流につなげたのは秋田雨雀だったと申しましたが、その雨雀は、ロシア革命10周年にあたる1927年に、モスクワに招待されました。

このロシア革命10周年には、世界各国から作家や思想家がモスクワに招かれました。フランスからはアンリ・バルビュスなど。日本からは秋田雨雀、小山内薫、米川正夫（陸軍大学教授）など4名です。アメリカの哲学者ジョン・デューイも招かれました⁽¹³⁾。

秋田雨雀は、現在ではそれほど有名ではないかもしれませんが、当時は有名な劇作家でした。『秋田雨雀日記』を見ますと、1927年10月にシベリア経由でモスクワに向かっています。モスクワに到着してまもなくエロシェンコとの再会を果たしていて、わりあい頻繁に往き来して、ロシア語の指導を受けたりしています。また、雨雀はソ連のエスペ란ティストたちとの交流もしています。

そういう経験をして日本に帰国した雨雀は、蔵原惟人や村山知義と語らって、国際文化研究所を設立しました。そしてこの国際文化研究所が、1929年夏に夏期大学というものを開催しました。実態は外国語講習会です。教材として「新興科学と新興芸術の代表作を使う」というふれこみだったと言いますが、「新興科学」というのは要するにマルクス主義ということです。およそ400人近い受講生が集まったとのこと。

高杉のエスペラントとの出会い

この夏期大学が開かれたとき、高杉は、東京高等師範学校、当時は東京高師と言いましたが、その学生でした。そして、この夏期大学があると知って、そのフランス語上級クラスに申し込みをしました。そのクラスの講師の一人に佐々木孝丸がいたのです。佐々木孝丸は、革命歌の「インターナショナル」の作詞者としても知られていますが、私などは、子どもの頃に見た映画で、脇役の登場人物として佐々木孝丸の名前を見た記憶があります。

ついでに申しますと、東京高師の教授に丘浅次郎（1868-1944）がいました。丘は日本で最初のエスペ란ティストでした。ただ、丘は動物学の教授でしたし、高杉さんが参加した国際文化研究所の夏期大学が開催された1929年には東京高師を定年退職していますので、高杉さんとエスペラントを介しての交流はなかったようです。

この国際文化研究所の夏期大学には、エスペラントのクラスもあって、佐々木孝丸は、エスペ란ティストでもあったので、エスペラントのクラスの教師と校庭でよく話

をしていたそうです。エスペラントの講師には、大島義夫(1905-92)とか、中垣虎児郎(1894-1971)などがいて、校庭でオーラルメソッドによる会話をしたり、歌を歌ったりと、なにか楽しそうだったといえます。佐々木孝丸は、フランス語クラスの受講生だった高杉さんに、「どうだ、きみもエスペラントをやらないか。東京堂へいけば、エスペラント関係の本を集めたコーナーがあるよ」と誘ったと言います。そこで高杉さんはさっそく東京堂に行き、秋田雨雀・小坂狷二おさかけんじ共著の『模範エスペラント独習』という本と、エドモン・プリヴァの『ザメンホフの生涯』⁽¹⁴⁾という本を買った。

この『模範エスペラント独習』の著者の小坂狷二は、ご存知の通り、日本エスペラント運動の父とも言われる人物です。高杉さんはさっそくこの『模範エスペラント独習』を3・4回読んだ。すると、佐々木孝丸は、高杉さんをエスペラントの講師たちに紹介してくれた。そして、エスペラントの歌を教えられ、比嘉春潮(1883-1977)の家での集まりにも連れて行かれたと言います。この集まりは、柏木ロンドと言われていて、新宿の柏木にあった比嘉春潮の家でのエスペラント研究会です。そしてそのメンバーに、比嘉の他に、中垣虎児郎・大島義夫・伊東三郎などがいました。つまり、国際文化研究所の夏期大学でエスペラントの講師になっていたのは、みなこの柏木ロンドのメンバーだった。のちに、日本のプロレタリア・エスペラント文化運動の源流になった集まり、というわけです。高杉はとくに伊東三郎の熱弁に大いに惹かれるところがあったと言います⁽¹⁵⁾。

エスペラントは、大杉栄のような人も学びましたが、左翼の人々だけが学んだわけではもちろんなくて、北一輝とか、柳田國男なども学んでいます。柳田は、1921年に国際連盟の委任統治委員になりますが、国際連盟における公用語が英語とフランス語だけであることに疑問を感じ、国際語・エスペラントの重要性に思い至り、自らエスペラントを学びます。国際連盟事務次長だった新渡戸稲造もエスペラントを重視していました。

新渡戸や柳田が社会主義の立場には立っていないことは言うまでもありません。

留学生との交流

高杉がエスペラントの勉強を始めたのは1929年だったと言いましたが、日本におけるエスペラントの歴史から見ると、ちょっと独特の時代かもしれません。

第一に、当時はエスペラント運動が非常に盛んな時代だった。

比嘉春潮は、1923年に東京にやってきたとき、エスペラント運動の花盛りだったと言っています⁽¹⁶⁾が、おそらくその状況は高杉がエスペラントに接した1929年でも、あまり変わらなかったのだらうと思います。

第二に、中国人留学生との関係があります。中国の師範学校や北京大学でエスペラントの学習を必修にするという時代でしたから、日本に留学して来ていた中国人学生の中にエスペラントイストが少なからずいたのは当然でしょう。

高杉がエスペラントを学び始めたのは、東京高師の学生時代です。この東京高師には、少なからず中国人の留学生がいました。そしてその中にはエスペランティストもいたのです。その学生のひとりが、王執中という人物でした。お互いにエスペラントを学んでいるということがわかり、高杉と王執中は急速に親しくなりました。王執中は同時代の日本文学に関心があり、これは重要だと思われる作品を翻訳して上海の開明書店に送っていたと言います。

高杉はそれまでは、中国人留学生にはまったく関心をもたなかったとのことですが⁽¹⁷⁾、エスペラントを媒介にして、中国人留学生のエスペランティストに接してからは、中国人留学生に対する姿勢が大きく変化したと言います。

王執中がエスペラントを学んだのは、一時期北京にいたエロシェンコの教えを受けていた人だったそうで、だから、自分はエロシェンコの孫弟子だと高杉に言ったということです。

また、王執中は魯迅を非常に尊敬していて、高杉に魯迅について熱心に話をした。当時の日本では、魯迅はまだあまり知られていなかったのですが、王執中は高杉に、『阿Q正伝』のエスペラント訳を貸してくれたと言います。そして、魯迅が日本に留学していた時代に過ごした仙台の町を見たいというので、一緒に仙台に出かけたこともあったという具合で、二人は非常に親密な付き合いをしていたということです。

しかし、まもなく王執中は、上海の開明書店で働くために中国に帰って行った⁽¹⁸⁾。

外国人との文通

高杉がエスペラントの勉強を始めた頃、『Sennaciulo (無民族者)』というエスペラント運動の機関誌があって、そこには国際文通を希望するエスペランティストの名前と住所がズラッと並んでいたそうです⁽¹⁹⁾。そこに掲載されていた外国人に高杉は手紙を出し、ライプツィヒに住む人、モスクワに住む人とエスペラントによる文通をしたとのことでした。

しかし、この文通はさほど長続きしませんでした。なぜなら、ヒトラー政権の成立が1933年ですが、それに伴い、エスペラント運動が弾圧されるようになるからです。ヒトラーは、彼の『我が闘争』において、エスペラントをユダヤ人の言語だと批判していました。

先ほど、秋田雨雀がロシア革命10周年を記念してモスクワに招かれたと言いましたが、その時期は、まだスターリンの独裁までには至っていない時期でした。しかし、やがて、ソ連でもエスペラントは弾圧されるようになる。高杉は、『スターリン体験』という彼の著作で、スターリンが、エスペラントを容認する立場をとっていたのに、逆にそれを否定する立場に方向転換していたことを跡付けていますが、そのことを認識したのはシベリアから帰還した後のことで、1930年代の日本では、まだエスペランティスト

弾圧のことはよくわかってはいなかった。

改造社時代

高杉がエスペラントに接したのは、今お話ししたように1929年夏でした。この頃高杉は、ジョン・デューイの教育学に惹かれて、東京高等師範学校を卒業したあと、前年に誕生したばかりの東京文科大学の教育学科に入学します。しかし、教育学関係の書物の読書会（当時の言い方ではR S）をしていたという理由で文理科大を放校になってしま

う。

その後、少し時間を置いて、1933年に改造社に入社することになります。

改造社では、当初は露和辞典、ロシア語の辞典編纂の担当となりました。といっても、それは、露英辞典の翻訳をするようなものであったそうです。日本の敗戦後に、高杉はシベリアに抑留され、そこで耳で聞いたロシア語を覚えていくことになりますが、露和辞典の担当をしていましたから、ロシア文字にはいささかの慣れ、心得があったわけ

です。

改造社には、先ほど柏木 Rond ということでふれた比嘉春潮が働いていました。もっとも、比嘉は高杉と同じ部署にいたわけではありませんでした。また、同じくエスペラントイストの中垣虎児郎が、その比嘉春潮のところを訪ねてくることもあったと言います⁽²⁰⁾。

改造社に入社して3年ほどのちに、高杉は改造社の雑誌『文藝』の編集主任となります。彼は『文藝』の編集方針として、日本の文壇の作品を掲載するだけでなく、外国文学に関連する作品や論考を掲載しようと考えていました。外国文学と言いましても、掲載された作品の数は多くはありませんし、概してヨーロッパ系のものが多いのですが、中国人作家の作品もありました。ある種のインターナショナリズムと言ってよいと思います。

高杉はエロシェンコと長谷川テルにふれて、次のように書いています。

私が中国にたいする強烈な関心をかきたてられることになったのは、青年のころ、日本の中国にたいする侵略行動を目のあたりに見ながら、エスペラントイストである自分はなんとか曲がりなりにもインターナショナリズムに忠実な生き方をたぬきたいと切望していたからにほかならない。

ここにあげた二人は、私の理想とした生き方を実践したために、日中間題について同時代の日本人よりもはるかにひろい地平を見わたすことができたエスペラントイストたちである⁽²¹⁾。

これは、戦後になってからの回想ですが、高杉の自己認識が表明されています。彼は

エスペラントの運動にもっぱら携わるという方向には進みませんでした。エスペラント運動が持っていたインターナショナリズムを、編集者としての活動のなかで生かそうとした、と言えると思います。それが、ヨーロッパの文学の紹介とか、中国人作家の仕事を雑誌『文藝』の誌面に反映させることにつながったのだと思います。

この雑誌『文藝』は一般の商業雑誌ですから、そこに登場した作家たちの政治的立場はむろんさまざまです。一方に、小林秀雄や川端康成のような人がいて、他方に中野重治や中条百合子⁽²²⁾がいた。三木清とか戸坂潤も登場しています。右から左まで、さまざまです。

中国人作家として目を引くのは魯迅です。改造社社長の山本実彦は、上海まで出かけて魯迅に会っています⁽²³⁾。魯迅は1936年10月に亡くなりますが、改造社では翌年に、山本社長の意向もあって『大魯迅全集』7冊を出版しました。この全集の訳者のひとりが中国文学者の松枝茂夫(1905-95)で、この人はエスペランティストです。

高杉が編集をしていた雑誌『文藝』1936年12月号でも、魯迅追悼という小特集を組んでいます。

日中文学者往復書簡

改造社の雑誌『文藝』での仕事として、高杉がくり返し語ったのは、日中文学者往復書簡です。高杉は、つぎのように回想しています。

日本が中国に対する全面的な侵略戦争をはじめた一九三七年に、私は改造社で雑誌『文芸』の編集をしていた。戦争に先立つ数カ月まえに計画をたて、今後毎月一回、日本と中国の作家が定期的にとりかわす文芸通信を組織しようと、当時上海でくらしていた鹿地巨氏にそのだいたいの概略をつたえて斡旋を依頼した。鹿地氏が中国側の人選をひきうけてくれて、第一回はそのころ「中国のショーロホフ」と呼ばれていた蕭軍と中野重治、第二回は中国演劇界の指導者であった夏衍と久板栄二郎、第三回は女流作家の丁玲と宮本百合子のあいだの往復書簡を発表することにきまった。

この「文芸通信」の第一回は、昭和十二年の六月十一日に印刷納本された『文芸』の七月号に発表され、第二回は八月十一日に印刷納本された九月号にかなりの削除をうけて発表されたが、第三回目はついに陽の目をみるができなかった⁽²⁴⁾。

それにしましても、満州事変以後の状況のなかで、この「往復書簡」のような編集プランを思いついたのはなぜだったのか。それについて高杉は、つぎのように書いています。

それはエスperantoを学んでいた私のインターナショナリズム、頭のなかの観念からだったのであろう。日に日に黒い影を大きくしていくナショナリズムへの抵抗意識だったと思われる。その抵抗がまことにはかないものだとわかったときの私の挫折感は大きかった⁽²⁵⁾。

今お話ししました「日中文学者往復書簡」という企画のあと、雑誌『文藝』の1937年12月号の付録に、「現代支那文学事典」が付けられました。今でこそ、日本における中国文学の紹介は活発ですが、当時は日本語で読める同時代の中国文学の作品は至って少なかった。そういう時代での「文学事典」でした。「日本で編集された最初の中国文学辞典⁽²⁶⁾」だということですが、この文学事典の作成に尽力したのが、竹内好などの中国文学研究会の人びとで、そのひとりが先ほどふれた松枝茂夫でした。

松枝は、旧制福岡高校の学生時代からエスperantistだったとのことですが、この「現代支那文学事典」の企画へのお礼に、松枝が上海で買い求めたというエロシェンコの『ある孤独な魂のためいき』という小さな本をくれたと、高杉は回想しています⁽²⁷⁾。

この本を入手したとき、高杉は感動をもってこれを読んだと書いていますが、エロシェンコ作品を雑誌『文藝』で紹介するということはしていないと思います。

その後、高杉は何回か転居をしたにもかかわらず、この本は残っていた。それが、シベリア抑留から帰還した高杉の仕事に大きな意味を持つこととなりますが、その点はまたのちにふれます。

シベリア抑留

改造社の主要な雑誌『改造』は、戦時中に時局に対するやや批判的なスタンスを取ったこともあり、横浜事件のあおりを受けて、1944年に改造社は中央公論社とともに廃業に追い込まれます。東條英機内閣の時代です。改造社が廃業に追い込まれるその時期を狙ったかのように、高杉のところに召集令状が舞い込みます。彼は1908年生まれで、召集令状が届いたのは36歳のころです。それを聞いた同僚が、「これは懲罰召集だ」と言ったそうですが、高杉の小学校の同級生は誰一人召集されていなかったそうですから、懲罰的に召集されたのかもしれませんが。

召集されて満州に行き、そこで敗戦を迎えるのですが、ソ連軍によってシベリアに連行されます。そして、1949年の夏に日本に戻ることになります。約4年間の抑留生活でした。彼の抑留先は6ヶ所ありました。むろん本人の意志で場所を変えているのではなく、強制的に移動させられるわけです。ラーゲリと言っても、非常に過酷なところもあれば、拘束力がやや弱いところもある。1948年初夏から年末にかけては、イルクーツク市内の道路の舗装作業に従事しました。石を敷き詰めた市内の道路の補修作業をしたそう

です。場所はイルクーツク市内ですので、ロシア人との間で言葉を交わすこともありました。

あるとき、高杉がイルクーツクの書店で購入したという露英辞典（ロシア語・英語辞典）を、昼食後に夢中になって眺めていると、ロシア人から“Do you speak English?”と話しかけられた。それは大学生だったのですが、その学生と少し会話をした後で、

「君はエスペラントを話す？ それとも、君の大学にエスペランティストはいない？」

と訊ねたところ、「イスペラン？」と、エスペラントという名称自体を知らないようすだった。「モスクワの大学で勉強したザメンホフ博士がつくった言葉」と訊いても「知らない」というだけだったといえます⁽²⁸⁾。

この会話は高杉にとってかなり印象的なものだったようで、高杉の著作『スターリン体験』でも『征きて還りし兵の記憶』⁽²⁹⁾でも、同じような趣旨のことがくり返されています。

ここで特に注目したいのは、「君はエスペラントを話す？」と質問したときに、この質問は「シベリアに連れて来られてからずっと胸のなかにつかえていた質問」だと書いているところす。つまり、高杉は、1930年代初めに、モスクワ在住のロシア人とエスペラントを使って文通していたことがあったというのに、シベリアに連行されてこのかた、一度もエスペラントを耳にしたことがなかった。それはなぜなのか、という疑問を抱えていたというわけです。この疑問を解くのは、シベリアから帰還してのちのことに なります。

高杉作品

高杉は1949年夏に日本に戻ります。戻ってから1年ほどして「シベリア俘虜記」として『極光のかげに』を刊行しました。この後、高杉はじつに精力的に仕事をしています。1950年代の主な仕事を並べますと、

1953年1月 エロシェンコ「ある孤独な魂」の翻訳（『文化と教育』4（2））

1954年 長谷川テル『嵐のなかのささやき』の翻訳（新評論社）

1955年 クロボトキン『ある革命家の思い出』の翻訳（『世界教養全集』26、平凡社）

1956年 『盲目の詩人エロシェンコ』の刊行（新潮社）

1957年 スメドレー『中国の歌ごえ』の翻訳（みすず書房）

という具合ですが、エスペラントを意識したものが多い。エロシェンコと長谷川テルは、どなたもご存じの通り、エスペランティストです。

少し話がそれますが、伊東三郎に『エスペラントの父 ザメンホフ』という岩波新書があり、これが1950年に出ています。その「あとがき」をみますと、「本当のザメンホフ伝を書けと求められて、年月がたちました。戦後の若い世代はその名前さえも忘れており、長年のエスペランティストは偶像にしてしまいこんでいます。」と書かれています⁽³⁰⁾。

つまり、伊東三郎の認識では、1950年ごろの日本では、ザメンホフやエスペラントは忘れられたような存在だった。そういう、言ってみれば「はやらない」ことに高杉は取り組んだわけです。

高杉は、戦前にはエロシェンコの名前は知っていたのですが、その作品に取り組むところまでは行かなかった。それから、エスペランティストの長谷川テルが、東京で中国人のエスペランティストと結婚して中国に渡ったのが1937年4月です。その頃、高杉は雑誌『文藝』で「日中文学者往復書簡」の企画に取り組んでいた。長谷川テルと同じように、日本の中国侵略に反対しているエスペランティストだったわけですが、同じく東京に住んでいても、高杉はテルのことを当時はまったく知らなかった。はじめて知ったのは、1952年の初夏のことで、豊中市のエスペラント通信社から復刻された長谷川テルの遺著『嵐の中のささやき』と『戦う中国にて』を読んだからだったといえます⁽³¹⁾。

なぜエロシェンコを訳したか

シベリア抑留時代に、高杉はひとりのエスペランティストにも出会うことがなかった。それはなぜなのか。日本に戻ってから、その理由はスターリンによるエスペラント抑圧にあったのだと認識し、そこからエロシェンコについて調べようとするに至ったというわけです。同時に、エスペランティストとして日本の中国侵略に抵抗した長谷川テルの作品を翻訳し、広く世に伝えよう。そういうように考えたのです。それが1950年代の初めです。エロシェンコが日本を去ってからほぼ30年という時間が流れていました。

30年といえば、長いようですが、ある意味では長くない。と言いますのは、その時点では、エロシェンコを直接に知る人たちがまだ存命中だったからです。

その時点では、エロシェンコがまだ生きているのか死んでしまったのかさえわからなかった。しかし、やがて1957年になって、エロシェンコは1952年12月に亡くなっていたという情報もたらされます。

そこで、高杉はエロシェンコの追悼会をしようと考え、1959年2月6日にその追悼会を新宿の中村屋で開いたのでした。そこには、秋田雨雀、神近市子、鶴田吾郎、高津正道、福岡誠一、小坂狷二、正木ひろし、伊東三郎らが集まったといえます⁽³²⁾。また、エ

ロシエンコと親密だった鳥居篤治郎も存命でした。

このような人びとの協力を得ながら、まず1956年に『盲目の詩人エロシエンコ』を書きます。そして、1959年に『エロシエンコ全集』3冊を、みすず書房から刊行しました。

その15年後の1974年に、同じくみすず書房から『エロシエンコ作品集』2冊を刊行しました。そして、その成果を踏まえ、『夜明け前の歌 盲目詩人エロシエンコの生涯』という本を、1982年に岩波書店から出版します。

みすず書房から2回目に出た『エロシエンコ作品集』ですが、なぜ全集ではなく作品集という題名にしたのか。その理由はわかりませんが、この『作品集』に収録されなかったエロシエンコ作品があってもふしぎではないと感じていたからかもしれません。

そして、事実、この『作品集』に収録されなかったエロシエンコ作品はあったのです。

この『エロシエンコ作品集』を見ればわかることですが、エロシエンコは1923年に北京を離れ、モスクワに行きます。モスクワに戻ってから、1952年に亡くなるまでの30年近い期間にエロシエンコはなにをしていたのか。『エロシエンコ作品集』第2巻には、「盲目のチュクチ人」という短篇が収録されています。これは、1920年代末にエロシエンコがシベリアのチュコト半島、つまり、シベリアの一番東側、隣はアラスカというところまで出かけたときのことを描いた作品です。こういう作品が見出されたからには、エロシエンコがソ連帰国後に書いた作品が他にもあるのではないかと考えてもふしぎではありません。

しかし、中国からエロシエンコが戻ったソ連は、まもなくスターリン時代となります。

そこで、高杉は、問題をつぎのようにまとめています。

日本や中国では、作家として、あんなにも自由奔放にふるまっていたエロシエンコが、祖国に帰ってからは、その活動の舞台をほとんど盲人教育の分野にしか見出せなかったように思われるのはなぜなのか⁽³³⁾。

こういう問いですが、とはいえ、ソ連に戻ってからのエロシエンコが、完全に作品を書くことをやめてしまったわけではありませんでした。この『エロシエンコ作品集』に収められなかったエロシエンコ作品はあったのです。

エスペラント版6巻『エロシエンコ選集』には、La trimova ŝakproblemo (チェスの三手詰め問題) という作品が収められています。

そして、高杉さんは、このエロシエンコ作品を日本語訳していました。ただ、その翻訳を発表する適当な場を得られなかったのか、発表されないまま、高杉さんは亡くなってしまいました。その翻訳原稿が、じつは軽井沢の高杉さんの山荘に残っていたのでした。

それが2021年7月、日本エスペラント図書刊行会から『エロシェンコのシベリアものがたり⁽³⁴⁾』という題で出版されました。

今、ソ連に戻ってからのエロシェンコが創作活動の場を非常に制限されてしまったのはなぜかという高杉の問いを紹介しましたが、その答えは、スターリン体制のしからしむるところだったということになるでしょう。

ご自身がシベリアに抑留された経験を持ち、スターリン体験をくぐった高杉は、生きた場所は異なるけれども、スターリン体制に押しつぶされそうになったエロシェンコに共感を寄せ、その生きた足跡を、作品集そして伝記という形で残そうとした。

高杉さんはエスペランティストの運動の積極的な活動家ではなかったとご本人は言っていますが、エスペラントの国際主義的な発想をずっと持ち続け、長谷川テルの著作を、その翻訳を通じて紹介し、エロシェンコの作品集を出版し、両者の伝記を書き、さらには、それと連動してクロボトキンの著作の翻訳にも及んだ。そういう仕事をされたのでした。

高杉さんご本人は、青年時代に「ザメンホフとそのエスペラント精神」にふれた人生だったと振り返っています。まさしくその通りだったと思います。

最後にひとつのことを付け加えさせてください。私は、本日ここでお話をさせていただくことになり、その準備のために、エロシェンコが日本に滞在していた時期に、エロシェンコのことを日本の新聞にどのように報道されていたか、少し調べました。

そうしましたら、1921年8月の読売新聞に、「禍ひの牙」という6回連載のエロシェンコ作品が「読売おとぎばなし」として掲載されていました⁽³⁵⁾。この「禍ひの牙」は、高杉一郎編集の『エロシェンコ作品集』にも収録されていません。

この作品は、動物の世界に平和はあり得るかということを描いた寓話です。1919年のヴェルサイユ講和会議の頃を思い起こしながら読めば、あるいは現在のウクライナでの戦争を連想しながら読めば、味わい深い作品です。

高杉先生がご存命ならば、この作品を知って大いに喜ばれるのではないかと思います。

ご清聴、ありがとうございました。

付記

この論考は、第109回日本エスペラント大会（2022年9月24日、八王子学園都市センターで開催）での講演用原稿に若干の加除を施し、「注」を付加したものである。この講演の短い要約が、日本エスペラント協会会誌「エスペラント／La Revuo Orienta」2023年2月号に掲載予定である。

注

- (1) 石原吉郎（2000年）『石原吉郎評論集 海を流れる河』同時代社。太田による「解説」を付した。ただし、同時代社編集部編となっている。

- (2) 太田哲男 (2008年) 『若き高杉一郎 改造社の時代』 未来社、高杉一郎著・太田哲男編 (2009年) 『あたたかい人』 みすず書房。
- (3) 第24回・1950年下期。この回は受賞作なし。ちなみに、51年下期には堀田善衛が受賞、52年下期には松本清張が受賞。
- (4) クロボトキン (1920年) 『革命家の思出：クロボトキン自叙伝』 大杉栄訳、春陽堂。ちなみに、この作品は、アメリカの雑誌『アトランティック・マンスリー』に連載されたものである。内務省特高警察は、エロシエンコが大杉一派の集会に出ていたこと、エロシエンコがその集会でクロボトキンと会っていたこと、アナーキズムについて語ったことを把握していた。「特別要視察人状勢一斑 第六」松尾尊兌編 (1984年) 『続・現代史資料1 社会主義沿革1』、みすず書房、478ページ。また、同書、699ページにも、エロシエンコの名前が出てくる。
- (5) 秋田雨雀 (1965年) 『秋田雨雀日記』 第1巻、未来社、1915年4月26日条。この日、秋田雨雀は、帝国劇場の楽屋で、エロシエンコを島村抱月に紹介している。また、大杉栄にも紹介している。
- (6) 大杉栄 (1989年) 『大杉栄・伊藤野枝選集・第十四巻：大杉栄書簡集』 黒色戦線社。
- (7) コスモ倶楽部については、松尾尊兌「コスモ倶楽部小史」(松尾尊兌 (2014年) 『大正デモクラシー期の政治と社会』 みすず書房、所収) 参照。
- (8) 「最近ニ於ケル特別要視察人ノ状況 大正十一年一月調」松尾尊兌編 (1986年) 『続・現代史資料2 社会主義沿革2』、みすず書房、115ページ。なお、同ページには、「コスモ倶楽部」への言及もある。
- (9) 叢文閣刊。叢文閣の創業者・足助素一は、有島武郎の学生時代からの友人で、叢文閣は有島の著作集なども出版した。
- (10) 中国のエスペランティスト胡愈之と高杉は、戦後に親交があった。
- (11) 当時魯迅が接したエロシエンコ作品は、第一創作集『夜明け前の歌』収録作品である。
- (12) 「訳者附記」などは魯迅 (1985年) 『魯迅全集』 第12巻、学習研究社、259ページ以下。また、『魯迅日記』は、『魯迅全集』 第17巻 (日記I) に収録。しかし、『魯迅日記』は、エロシエンコとの交わりという点で最も重要と思われる1922年の分が失われている。
- (13) ジョン・デューイ (1930年) 『ソヴェートロシヤ印象記』 山下徳治訳。なお、デューイがモスクワに入ったのは、翌年1928年だった。
- (14) エドモン・ブリヴァ (1923年) 『ザメンホフの生涯』 (日本語訳は『愛の人ザメンホフ』) 松崎克己訳、叢文閣。
- (15) 高杉一郎「伊東三郎」(高杉一郎 (1981年) 『ザメンホフの家族たち』 田畑書店、所収。以下、『家族たち』と略記)
- (16) 比嘉春潮 (1969年) 『沖縄の歳月 自伝的回想から』 中公新書。比嘉春潮の自伝は、当初「年月とともに」という題名で1964年『沖縄タイムス』に連載された。これを一部手直ししたのが、比嘉春潮『沖縄の歳月 自伝的回想から』(中公新書)である。比嘉春潮 (1971年) 『比嘉春潮全集』 第四巻 (沖縄タイムス社) 所収版は、新聞連載に基づくもので、これを底本として平凡社の『日本人の自伝14』(1982年)に収録。
- (17) 高杉一郎 (1997年) 『ひとすじのみどりの小径 エロシエンコを訪ねる旅』 リバーロイ社、24ページ。
- (18) 高杉一郎 (1996年) 『征きて還りし兵の記憶』 岩波書店、208ページ (以下、『記憶』と略

記。) なお、この本は、その後、「岩波現代文庫」(2002年)に収められた。なお、葉蘊士(1911~94)という中国エスペラント運動のリーダー格だった人物も東京高師に学んだ。葉蘊士も、満州事変・上海事変が始まってまもない1932年に、上海に帰って行った。ただし、この葉蘊士は、東京高等師範学校の学生時代に、高杉と知り合いになってはいなかったというが、戦後の両者には親交があった。

- (19) 高杉一郎 (1990年) 『スターリン体験』 岩波同時代ライブラリー、48・245ページ。
- (20) 高杉は、改造社に入社した頃、「引き潮」という短編小説をエスペラントで書いたと言う。それを見た中垣虎児郎が、「これだけ書けるとは思わなかった」と言って、『ESPERANTA LITERATURO』というエスペラント雑誌にそれを掲載してくれたとのこと。(このエスペラント作品の筆署名は筆名で、Suguro-Hideo)しかし、高杉によるエスペラントの創作はこの一篇だけとのこと。(高杉『ひとすじのみどりの小径』53ページ。)そして、エスペラント運動の活動家になることもなかった。高杉がエスペラントの運動に積極的に関わらなかった理由は、教育学の方に関心が向いてしまったからだと言っている。
- (21) 「エロシェンコと長谷川テル」は、『朝日ジャーナル』1972年5月5日号、所収。のち、これを竹内好・橋川文三編(1974年)『近代日本と中国』上・下(朝日新聞社)に収録するに際し、前書きのようなものが追記された。この引用は、その追記部分である。この論考は、高杉一郎(2009年)『あたたかい人』(太田哲男編、みすず書房)に収録されたが、そこにはこの追記部分は含まれていない。
- (22) 高杉はのちに宮本姓となった作家を、多くの場合、中条百合子として書いている。
- (23) 改造社の総合雑誌『改造』には、魯迅の作品が5回ほど掲載されている。雑誌『文藝』にも、魯迅の書いたものが少なくとも3点出ている。「『大魯迅全集』の大は、全集にかかるのではなく魯迅にかかるのだ」と山本社長は言っていた、と高杉は私に語った。
- (24) 高杉「日中エスペラント交流史の試み」『家族たち』170ページ。
- (25) 高杉、同、171ページ。
- (26) 高杉『ひとすじのみどりの小径』83ページ。
- (27) 『記憶』225ページ。この『ある孤独な魂のためいき』という本には、中国のエスペラントイストである胡愈之の「まえがき」が付いているとのこと。私(太田)はこの本の現物を見たことがないが、エロシェンコ作品のアンソロジー・エスペラント版だと考えられる。高杉『ひとすじのみどりの小径』83ページ参照。また、エロシェンコ著・高杉一郎編(1974年)『ワシリイ・エロシェンコ作品集1 桃色の雲』(みすず書房)の「あとがき」に、「ある孤独な魂」という作品は、「一九二三年に上海で出版されたエスペラント創作集Gemo de unu Soleca Animo から私が訳したもの」だと書かれているが、これは松枝からもらったテキストによるものだと思う。
- (28) 高杉一郎(1991年)『極光のかげに』岩波文庫、258ページ。
- (29) 高杉『スターリン体験』242ページ。『記憶』220ページ。なお、高杉一郎(2008年)『わたしのスターリン体験』(岩波現代文庫)は、『スターリン体験』を一部書き直したものである。
- (30) 伊東三郎(1950年)『エスペラントの父 ザメンホフ』岩波新書、234ページ。
- (31) 高杉一郎(1980年)『中国の緑の星』朝日新聞社、201ページ。また、高杉『記憶』207ページにも同様のことが述べられている。
- (32) 高杉一郎(1982年)『夜明け前の歌 盲目詩人エロシェンコの生涯』xページ。

- (33) 高杉『夜明け前の歌』386ページ。
- (34) エロシェンコ (2021年) 『エロシェンコのシベリアものがたり』日本エスペラント図書刊行会。この本に収められた高杉の娘である田中泰子さんの一文によれば、高杉はエロシェンコによるエスペラントは、散文も韻文も素晴らしいと語っていたという。そうだとすれば、高杉がエロシェンコの作品に惹きつけられた一因は、エロシェンコの文体だったということになる。
- (35) 先に挙げた「チェスの三手詰め問題」は、エスペラントのテキストは以前から知られていたが、高杉訳が先頃見つかったという経緯だった。しかし、この「禍ひの牙」は、日本語作品であり、エロシェンコによるエスペラントのテキストが存在するかどうかは不明。また、この作品の日本語テキストは、エロシェンコの口述を、だれかが筆記して成立した可能性は十分考えられるが、だれの筆記によるのかは不明。